

Title	福沢書簡の新資料(明治十一年二月一日付,吉良亨・永田一二宛)
Sub Title	
Author	会田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1973
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.45, No.2 (1973. 1) ,p.28(144)- 28(144)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	余白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19730100-0028

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢書簡の新資料(明治十一年二月一日付、
吉良亨・永田一二宛)

昭和四十五年十二月一日に大阪の毎日新聞社々史編集室の吉川一郎氏から福沢書簡一通の写真をお送りいただいた。兵庫県西宮市深谷一八番地にお住まいの矢野氏の所蔵にかかるものとのことであるが、その矢野氏というのは宛名の吉良亨の孫にあたる方だそうで、吉良はのち改姓して矢野となっているのである。また、同家にはこのほか矢野亨の養子丑乙うしおとに対する福沢の悔状などもあるということであるが、それは未定であるので、とりあえず右の写真の分だけをここに紹介しておこう。

なお、この書簡には発信年はしるされていないが、宛名の吉良、永田の両名が立志学舎に教師として就任していた時期から推察すると明治十一年のものかと思われる。すなわち、同校にはその創設当初から慶応義塾の出身者である深関内基・矢部善蔵・永田一二・吉良亨・門野幾之進・城泉太郎らが二名ずつづつ相ついで赴任しているが(『門野幾之進先生事蹟・文集』一五七ページ、植木枝盛稿「立志社始末記要」)、そのうち矢部の赴任は明治九年十二月といわれ(『慶応義塾出身名流列伝』五八八ページ)、門野、城の東京出発が明治十一年三月とあるから(『門

野幾之進先生事蹟・文集』一発〇ページ、城泉太郎日記)、永田、吉良の両名は十年から十一年にかけて在任していたことになり、それも二月はおそらく十一年であろうと考えられるわけである。

また、永田は明治四年三月十二日に十三歳で入学した中津出身の塾員で、のち同十三年には『愛国志林』第三編に「国会論」を書いたりしており、自由党系新聞人として活躍し、吉良は愛媛県の出身で、明治五年十一月六日に十八歳で入学し同八年四月に変則科を卒業、十七年には大阪商業講習所の所長心得、さらにそれが大阪府立商業学校と改称後も校長心得から校長に任じたりしている。そして、この商業学校が後年は大阪商科大学となったことはことわるまでもあるまい。

それから、文中の「板垣君」はもとより退助で、かれに宛てた「別紙壺封」というものの内容はこれだけでは不詳であるが、石河幹明著『福沢諭吉伝』第二卷(五三七ページ)によると、明治十一年ごろのこと、福沢は高知の板垣に書をよせて地方にながく引込んでいると世情にうとくなるから時おりは上京するがよいとすすめていたということであるから、そのころ板垣との間にはいろいろ連絡があったものであろう。(五二二頁へ続く)